快食快便も考えものだと栞は思う。
なまじ綺麗だとか可愛いとか言われるお陰で、最近富みに著しい食欲を満たすにも人目を憚らなければならないし、食べれば出るからまた腹が空く。おまけに育ち盛りだから三食に加えて間食も止められない。
そんなわけで元々豊満な栞の身体は最近になってますます成長し、胸と尻にはむっちりと柔らかい肉が付いた。ブルマなどを履いた日には尻の肉がはみ出すし、熟れ過ぎた乳房は自重で伸び垂れ気味になっている。丸みを失った乳肉の先端に肥大した乳頭部が盛り上がり、服の上からでもはっきりと目立って仕方が無い。
（はぁっ…また滲んでる…）
おまけにホルモンバランスがおかしくなっているのか、気が付けば胸がじんじんと張って母乳が滲み出してくる。その度に栞は湿ったブラジャーから生乳を引きずり出し、柔肉を根元から搾り上げてはびゅうびゅうと甘いミルクをしぶかせた。
排泄にも似て甘美な感覚に夢中で搾り過ぎたせいか、今や乳房の形は左右で異なり、それぞれが不自然な向きに反り返っている。それでも服を着ればスタイルは良いし、美人で気立ても優しいということもあって、栞に憧れる下級生は少なくなかった。

出物腫れ物所嫌わずと言うが、栞の便意はよく唐突に襲ってくる。だが付きまとう下級生のお陰で、今までのようにそうそう野糞をするわけにも行かなくなった。
この日も栞はファンの女子を振り切り、何とか便所に辿り着くことができたところだ。だが今日に限って彼女は試練を与えられることとなる。個室は全て満員だったのだ。
（ど、どうしよう…も、漏れる…漏れる…）
汚臭漂う空間であるのを良いことに何度か屁を放って両手に余る尻肉を必死で抑え付ける。それも一時しのぎに過ぎず、便の先が頭を出しかけたところで栞は決心して便所を飛び出した。
ぐるっ…ぎゅるるっ…ごりゅりゅりゅっ…
「はくぅぅっ！」
もうひとつの便所へ行くには来た道を戻らねばならず、ようやく播いた女子生徒と鉢合わせる可能性が高い。しゃがみ込んでしまいそうな腹痛と括約筋を押し開こうとする内側の力に栞の思考が一瞬ショートした。
（もうダメッ！）
モスウッ…モリュッ…
濃厚な屁と共に飛び出しかけた身がショーツに塗り付けられ、また直腸へと引き戻される。たまらず策も無く扉を開いて駆け込んだのは保健室であった。
幸いにして中は無人である。
（バケツか何か…何でもいいから！）
全身に鳥肌を立てて室内を見廻すと、膝くらいの高さに固定された足付きの洗面器が目に止まった。脱兎の如くそれを掴み上げて中に溜まった水を窓の外に捨てる。そこが一階であることを感謝しながら洗面器を台に戻し、覚悟を決めて栞はスカートを捲り下着を下ろした。
（お願い…誰も来ないで…）
窓枠の下に手を添えてガニ股になると、栞の大きな尻が洗面器の上に据えられる。ふくよかな肛門は縮れ毛の中で既に口を開き、硬そうな便の頭を露呈させていた。
ニチッ、ニチッ…ブッ、ブッ、ブスゥーッ…
「あ、あ…あぁっ…」
安堵と不安の中で脱力した括約筋が極太の大便を生み出しながら隙間からガスを放つ。排便の引き起こす強烈な快感にたまらず浮かべたアクメ顔を栞は保健室の窓から晒していた。窓外は裏庭だが花壇や菜園に誰かがやって来ないとは限らない。
「はぁっ…んっ！…く、はぁっ…」
ニチニチニチ…ムリュッ…モリュウッ…
力まずともたっぷり立て続けに大便が押し出されてくる。窄めた唇のように伸びきった肛肉からウネウネと排出されながら、栞の老廃物は洗面器の底にトグロを巻き始めた。匂う湯気が昇って窓の外へ流れ、嗅ぎ付けたウシ蠅がたちどころに二匹、三匹と姿を現し周囲を飛来する。
恍惚としていた栞であるが、その時ふと視界の隅に人影を認め、慌てて表情を取り繕った。
「あれ？　栞…なにしてんの？」
「え、えーっと…」
地上から多少高い位置にあるため外から見えないとは言え、排便の最中に誰かと話すことなど経験が無い。臭いが伝わらないかと冷や汗を流しながらも尻から溢れ出す糞便を押し留めることは出来ず、初めて味わう異様な感覚に栞は全身の毛穴が開くような錯覚を覚えた。
「保健室の、お掃除を頼まれて…んひっ！」
「…？…ふーん、頑張ってね…」
瘤状の硬い部分が直腸粘膜を通過する感触に思わず奇声を漏らした栞をクラスメイトの少女が怪訝な顔で見つめる。バレやしないかと泣き笑い顔の栞に不気味なものを感じ、その生徒はすぐに背を向けて菜園の作業に取りかかり始めた。
ムリュムリュムリュウ～ッ、ブスッ、ブスッ…
「はぁぁぁぁ～っ…」
焦点も定まらずに視線を泳がせながら、ようやく最後の部分をひねり出して栞の排便が終わった。振り返れば太い胴体をてらてらと光らせる糞肉の山が、洗面器から溢れるほど大量に生み落とされている。硬い先端部から軟らかくなるにつれて色合いも黄色みがかり、未消化のエノキやコーンが所々に露出して臭いも強烈だった。
当初は菜園に埋めてしまおうと考えていた栞だが、今はクラスメイトがいてそれは難しい。しかしこうしている内に誰かが来てしまえば破滅である。決心した彼女は洗面器に布をかけて便所へそれを流してしまうことにした。
「あ、栞さん！」
「ひっ！？」
廊下に出ていきなり呼び止められ、心臓が口から飛び出しかける。それはよりにもよって最もストーカー度の高い、栞の親衛隊長を自称する少女であった。
「これなんですかぁ？」
ひょいと布が取り去られて二人は一瞬硬直する。必死で展開する栞の言い訳も少女の甲高い声にかき消されてしまう。

「あのね、これは、えっと・・・ほ、保健室で具合の悪い子が・・」
「すごーい、さすが栞さん！ ウンチも特盛りですね！ いつもこんなに出ちゃうんですかぁ？ んー、でも何で洗面器に？ あ、そうかぁ、保健室でぇ、検便とかしてたんですねぇ？ うわ！ これエノキがそのまま出てますよぉ？ もっと良く噛まなきゃ！」
「ち、ちがうの・・・聞いて・・・」
「でもでもでもぉ、なんかちょっと美味しそう？ 私、栞さんのウンチなら食べてみたいかもぉ？」
余りに何かがズレている親衛隊長の攻勢にくらくらとしながらも、憧れの人間の汚物まで見せられて幻滅しない少女に、栞は不思議と母性をくすぐられるような愛しさを覚えた。

少女が茶道部に加わり、その強烈な汚物嗜好でメンバーを引かせるのは、この後間も無く起こる話である・・・。